

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イオン・ドラグミス「サモトラキ」
Author(s)	福田, 耕佑
Citation	プロピレア , 23 : 132 - 142
Issue Date	2017-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044343
Right	Copyright (c) 2017 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



イオン・ドラグミス「サモトラキ^二」

福田 耕佑 訳

京都大学文学研究科博士課程後期
日本学術振興会特別研究員

序文

その本性上労働者でもある旅行家が、私に読ませよう
と思つて一冊の手記を渡した。その書記の内容は、若者
達が読んで熟考するのに有益だと私には思われたが故
に、またこの同じ著者が、私にははつきりしていること
だが、彼の著作をよりよいものにするともできず、ま
た彼には印刷したエッセーを訂正する時間もなかつた
が故に、私は自分で印刷物の修正を行つて出版すること
を許可してくれるよう彼に願ひ出た。私は彼のことをよ
く知っているの、彼は私のしたいようにさせてくれた。

この本は、きつとエッセーであるが、余りに個人的で、
かの民族の自己意識に関して、今の時代の若者の心理学
的分析を含んでいる。故に私は、かの民族の若者達の関
心を引くことができるのではないかと考えている。

一九〇九年七月三十一日、アテネにて^三。

イダス^四

第一章・海

心寂^{うらさび}しいトラキアの海岸を、昼時、私は涼しい秋の海
から上がつて散歩していた^五。海は愛する女性のようにで
あり、私は彼女をもう自分の女にしてしまい、つい今し
がたその抱擁に別れを告げてきたばかりのようにも思
えた。今、私はこのずっと前から存在して皆によく知ら
れている、海辺の櫛の木の下に腰を下ろしている。涼し
い潮風によつて櫛の葉はかき混ぜられ、いつまでも囁き
続ける。私は眼前に海を見た。海は金の星で飾られた王
族のドレスのように揺らめき、私を惹きつける。今度は

左手に海を見た。海は熱い、快樂的な、濃紺の色で、そしてあらゆる熱情で着飾っていて、私はどこかで知り合っていたはずのこの手練れの女性を脳裏に描いていた。それから、初めてこんなにも注意深く遙か右手の、大昔からよく知っている、愛おしい海の中に、小高い島の優美な形を見渡した^六。その島の名を人々は大昔から知っており、音楽のように聴いていた。私もその名を噂には聞いており、地図の上でも目にしていた。だが今になって初めて、この島が本物なのだとは分かった。私は、魔法にかけられたように、いつまでもこうしていたい。この同じ激しさで今の幸福を永遠に噛みしめていたい。後になっても、私はこの幸福を呼び戻し、もうどうしたって自分の腸はらわたの中に永遠に納められなくなった後でも、もう一度永遠の形を与えたい。だが私はこの感覚に形を与えることができなくて、苦しみ、宙ぶらりんになった情熱でこの感覚を揺さぶりながら、一人でこんな風に自分の成熟した幸福を駄目にしていくのだ。

別の日の灰色の午後、外国の海岸にいた。曇り空の下、私は荒れた海を見やりながら、海際に座っていた。私を

捕まえたがっているかのように、南風が吹いていた。言いやうのない恐怖が私を捉えた。私がこの世界にたった一人で、他者と私を繋ぎとめてくれる紐が何も見つからないとき時にいつも感じるあの恐怖。きつと一度ぐらいはそう感じたはずだが、大地が他のものと引き離されて、混沌の中でぐらぐらと揺さぶられていて、その他のものも混沌の中で、自分達の間を結び付けてくれるものを見つけれないでぐらぐらと揺さぶられているのを感じた。その時、私も人間社会から見放され、この世界の中にうち捨てられ、身震いする。だから、私は愛おしい声にこう言ってほしかった。「たとえあなたがこの世界に一人で打ちひしがれていたって、私だって一人なのです。一緒にいきましよう」。だがあの暗い灰色の夜、私には何の声も聞こえず、また同じ道を進んで、不安がゆっくり、ゆっくりと悲しみに変わって、意識が消えゆくまで、私は海際を彷徨った。

昼には再び日が差し込んだ。海岸の小高い場所に行き、そこから砂浜を見下ろした。そして丈の短いドレスを着た少女が、髪は風に煽られ、裸足のまま、海で東方の絨

毯を洗っているのを目にした。絨毯は、いくつかは砂の上に投げ出され、またいくつかは小さな壁の上に積み重ねられていた。十七歳に満たないであろう、美しい、裸足の少年が一人、ポケットに両手を突っ込んだままその小さな壁の後ろに立ち、或る時は海を見たり、また或る時は彼女を見たりしていた。私は海岸の小高い場所に立ち、遙か遠くの海と島、そして私の眼下の海際を見、この裸足の少女が膝までに海に浸して、絨毯を濯いでまた海から出て来るのを見た。彼女の黒いスカートから水が滴っていて、彼女の脚は濡れていた。私がじっと見つめていたのを見て取るや、少年はそっと静かに、少し遠くの、砂浜に引き上げられていた漁師の船の方に身を引いた。少女は自分の仕事を終えた。小さな壁に腰かけ、地面から靴下を取った。この靴下を穿くため、むき出しの太腿が見えそうならいまでスカートを捲き上げ、脚を組んで座っていた。私が彼女のことを見ていないか確かめるために、彼女は時々私の方に首を向けた。海は朝日を浴びた彼女の美しい佇まいによって輝いていた。そして彼女はまっすぐ立ち上がり、靴を履いてペチコートを

拾い上げ、スカートの上から穿いて、スカートをほどいた。そしてまた上から結び付けたのだが、その間私をずっと見ていた。それから、彼女は腕を上げて髪を整えた。胸元が半分はだけていた。ゆっくり、ゆっくりと、ポケットに両手を突っ込んだまま、興味のなさそうなふりをして、日焼けした、まさに十代の若者らしいその少年が後ろからやってきた。彼は女体への初めての欲求から病に落ちてしまった。少女は、彼を見るや、少し離れたところにおいてあった手押し車に入れてあるものを取りに行くよう彼に叫んだ。そして彼女はエプロンを着て、また少し髪を整え、私が彼女を見ることの出来るように少し壁の上を歩いた。それから、ゆっくり、ゆっくりと私の方へ上り坂を上ってきた。少年は手押し車の方に身を引いたが、絨毯を取る代わりに、足を砂の方に投げ出して、その中に寝そべった。彼女は私達を見て、官能的熱情と苦々しい嫉妬から来る漠然とした嫌悪を抱いていた。少女は絶えず上りながら私を、海岸の小高い場所にしっかりと立っている私を見ている。海は朝日を浴びて輝いていた。少女の心の中では、その二人の男は

もうすっかり自分のものであった。しかし、私には、あの漠然とした欲情の病に落ちた少年が、全く目には入らなかった。そして快樂の海は、興味のなさそうなふりをして、いや、興味が無いわけがないのだが、あざ笑うかのように悪魔的な欲情を駆り立てていた。

それから海の中を、私は真つすぐ仰向けになって遠くまで泳いで、深く潜った。私を愛撫し、それからひどくぶつ波をすぐそばに見た。私の傍や真上を飛んでいるカモメや、大波がその根を引っこ抜いてしまったので、私と共に海中を漂っている海の植物と一緒に時を過ごした。

その後夜になって、夜は私の足元まで帳を下ろし、いつも変わらない美しさを敷き詰めて、静かに囁いていた。彼女にとって、私が誰で、どんな男であるかなどどうだつてよいのだ。夜はいつも変わることなく、絶えず私の足元までやってきて、私の目の前に、傷一つだつてない彼女の美しさを果てしなく敷き詰めていた。不平も言わなければ歌も歌わず、ただ私に贈り物を贈ってくれるかのように、彼女の美しさをもたらししてくれた。彼女は少

しも私を求めることもなく、私に触れ引き寄せようとしなかった。ただ私に与えるだけで、後は無関心。そして私がこれから何をして、これからどうなってしまうのか、私のことなどどうでもよかつたのだ。

同じ時、緑の大きな星が夜に溶け込んだ。彼女はその星を受けとめて、溶けだした真珠のようなその照り返しを私に送っていた。あれは鏡などではなく、むしろ星の様に命にあふれたもので、それらを愛が一つに結び付けていた。

ある日、気を張り詰めて一つ一つはつきりと、私は道端に落ちている物、草、岩々、砂、海、島々、木々、河の奔流、家々、そして人々を見ていた。それらの形が私の中で意識を貫いていた。夕方、砂浜の心寂しい一角で、一匹の狗が屍肉を噛み、食欲に引き裂いていて、また二羽の鴉もそれを貪っていた。私は近づいて、或る狗の死体を見た。私が近くを通りかかると、この一団は溶け去つて、二羽の鴉は飛び去り、狗は、私が見下ろしているのを目にして、私をじっとみつめ、尻尾を巻いて逃げ出した。ひよつとすると、鴉と同じものを貪っている姿を

私に見られて恥じいったのか、或いは屍喰らいの競争相手として私をみなしでもしたのだろうか。或いはひよつとすると、決まっていたのも間の悪い人間の好奇心に耐え切れなかったのであらうか。

ある冬の朝、私は太陽と共に起き、海の方を見た。その島は下まで真つ白で、砂浜も雪に覆われていた。そして私は初めて、太陽の熱によつて、海に静かに霧がかかっているのを見た。

昔は、同じ海が南風を伴つて岬の岩に三本マストの船を投げ出して粉々に打ち砕き、人々を溺れさせていた。あなただつて割に合わないと思うだろう。

その日、私は港で一つの会話を耳にした。

——クラニディオオーティスは最近どうだい。

——もう船長はやってないぜ。

——なんでだい。もう船をもっていないのか。

——持つてるさ。だが飲んだくれて、船長のものから船乗り達のものになつちまったよ。

——いや、だがよ、クラニディオオーティスは心のきれいなやつで、勇敢な男じゃないか。

——だからどうしたんだ。海だつて遊んでるんじゃないんだぜ。

もちろん海は遊んでなどいない。クラニディオオーティスは素直な心を持った勇敢な男であつたろうが、海は酩酊した船長達を受け入れはしない。彼らが酒の中に放り込まれる否や、海は彼らをおあつらえ向きの場所に案内してくれる。彼らを船長から船乗りにして、船もろとも溺れさせてしまうのだ。祖国も、このように厳格で、不屈な存在であらうに。

この近くで海に奔流を注いでいる赤い土を背にして、私は小さく、先の尖つた陸の端に近づいている漁船を見た。船の中には二人の男がいて、北東の風に逆らつて艀を漕いでいた。彼らはやつとのことで海岸にたどり着き、彼らの内の一人——大体十六歳ぐらいまでの子供で、裸足——が、漁船の舳先に片方の縄が結び付けられている縄の端をつかんで外に飛び出した。船の中には、二十三歳ぐらいまでの勇敢そうで、体の大きい方の男が座つたままだった。その子供は馬に軛をかけるように自分の肩に縄をかけ、ほとんど風に逆らつて船を曳いて、急いで街の

方へ歩いていった。船の中にいるもう一人の方は、浅い海の底、砂地に艀が達するほどに漕ぐことで、時々少しだけ彼を手助けしていた。私はその後を追いかけていた。その子供は、すぐに心寂しい海岸に行ったり来たりして、足早に私の前を通り過ぎた。陽の光が支配する前の春の斜陽が、海際や向こうの街に、またある所は耕されていて真つ赤になっていて、また別の所はここかしこに散らされている檜の木で真緑になっていた畑に火を放つ。遂に彼らは網を放っていた場所にたどり着いた。その子供は立ち止まり、少しだけ船を砂地に引き上げ、その船が横転しないように艀で固定した。そして船の中に飛び入り、水の入った甕を出して、渇きが癒えるまで飲んだ。それから、座り込んで、疲れていたの、両手を船体にかけた。もう一人の方は一言も話すことなく同じ場所に座って気怠そうに網の準備をしていた。

夏になった。私は、自分の脚でも、また馬に乗ってでもいいので、昼間にこの心寂しい海際を走りまわる事以外の何もしたくない。海は値がつけられない程に尊く、官能的で、甘く、毒氣に満ちている。あなたは魔女、私

を誑かす女のように、私はあなたを見つめ、あなたを苦しいほどに慕っている。私の身体全体は渇く。消すことのできない渇きを掻き消し、あなたと一つになるために、あなたの中に落ちてしまいたい。

少女達が砂浜で遊んでいた。一人はスカートをととても高くたくし上げて、貝を探しながら水の中を歩いて、それから上がって来て、線の綺麗な脚を自由に揺り動かしながら、木でできた小さな橋に座っていた。彼女は自分の自由を愉しんでいて、まだ恥じらいを知らなかった。

栈橋に十四歳から十七歳ぐらいまでの子供が二人座っていた。一人は裸で、私が通りかかった時、自分の脱ぎ捨てた服を見て、それで自分の身体を少しだけ覆った。もう一人はまだ服を脱いでいる最中だった。二人とも時代遅れな服を着ていた。裸の子供は、ほっそりした鼻と黒くて賢そうな眼をした、丸くて極めて形のいい頭をしていて、蠟燭のように柔らかく、女性らしい丸みを帯びた、焼けた身体に据え付けられていた。裸とその美しさがギリシア人達を魅了するのだが、彼らは肉体を言葉や韻律によってではなく、むしろその表面の彫り込まれた、

硬く、黙し、生命に満ち満ちた大理石の中に表現されるものだと感じていた。裸の少年は古代のレリーフに刻まれた青年であつたが、彼自身そんなことを知る余地もなかつた。

大時化とともに私はある場所へ旅に出かけた。北風が吹き荒れ、波の天辺は泡立っている。私は甲板を歩き回り、穏やかに永遠の海を見ていると、北風はほとんど私を連れ去ってしまうかのように凶暴だが、星は輝いている。私もまた星や海、そして大気等の他物のような一個の存在に過ぎず、それら他物のように孤独だが、自由であり、勝者である。私は何もの恐れず、何ものも私を押しさえつけない。私は笑いながら甲板の上を踊っている。波も笑いながら踊っているのだから。海が荒れ狂ったのだから、私も荒れ狂ったのだ。そして私は今日海に勝利したのだ。ある晩、私の乗った船はよく知っている島々の間を通った。雲のかかった空の向こうに、私のよく知っている、闇に覆われた島がすぐに見えてきた。嗚呼、私があそこにいさえすればなあ！

夏が巡り来る度、私の乗った船は同じ島々をまた横切

った。そして冬に私が闇に覆われているのを見たあの島を、今や海上の空気と海水が柔らかく打ち付け、太陽が洗う。そして流れは日没の陰に覆われ、乾いた山の背が董色に照らされる。私の魂は再びこの島に近づいて、それを愛撫せずにはいられない。私は初めて、この島に自分の足で踏み入りたいと思ひ、この瞬間初めて、記憶の底に眠っているような、その草々と土の香りに、私のところに来てもらいたくてたまらなかつた。

その島も、多くの海の帯を締められた、命にあふれる岩なのだ。

第二章・境界

白海の島のこの場所に、全ての風が集まって海と大気を撫でつける。猛る北風、南風、西風、東風が荒れ狂い、身を翻しては飛びかかり、この風を再び後ろに送り返し、眼下の山々を打つ。そして陸地の湾を埋め尽くしては再

び飛び出て、霊や山賊のように島々の間を通り、神秘的な話し声を途切れることなく風に乗せている。この場所では、滅多に嵐が海を平穏なままにさせておくことはない。黒海の海水が、二つの海峡からヨーロッパとアジアの二つの大きな陸地を通りながら、終わりなく白海の水で叱りつける^九。風は二つの海峡から一つに纏れ合つて集まり、くるくる回つて翻り、大気を割き、互いに格闘し、狂つて抑えきれずに、獰猛に大地の怪物に襲い掛かりながらまた散らばつていく。そして時に突然、魔法にかげられたように皆いなくなつてしまい、ただ柔らかくて甘いそよ風が海を愛撫し、激しく水を切るだけである。そんな時、海は笑っている。完全な風など存在しない。外からは眠つていて動かないように見える時でも、海はいつも生きている。海が大人しく笑っているように見える時でも、いつでも猛ることができる。そしてこのもてなしの悪い海が猛るとすぐに、獰猛に波を起こして泡を立て、開いた海際を叩き打ち付ける。波が向かう二つの島の間には、民が言うところの何かの霊が海の底に身を隠していて、海が猛るとすぐに、この霊が暴れて海

水をひっくり返してしまふのだ。その近くに女神テティダも洞穴も持っている^十。

風の時には、海は島の周りを穏やかな波で舐めつくす。風で叱りつける時には、海は猛り、島中を打ち付ける。夏には、海はこの島を抱擁し、時にはもつと強く抱きしめるが、時には疲れてしまい、香しく涼しい彼女の抱擁を緩めてしまふ。そして冬には、大気によってほんの少し凍つてしまふ。そんな時、夜明けには、風が吹いていないかのようには、太陽が出てきて、靄のかかった海を眺める。しかしまた夏が巡つて来て、海はまたこの島を抱擁し、体中を強く抱きしめる。だが島は呼吸と自由を求めて、海の抱擁をからその身を押し上げようとする。

海は、他者を明確に遮断し、鮮明に現れる、島の境界である。海がその島を他の世界から隔絶し、島は切り離され、それ一個で、孤独に生きている。ここは陸地で、あそこの周りは海。頂上から、はつきり区切られた、議論の余地のない、周りを取り巻く境界が見える。如何なる者がその境界に意義を申し立てることができようか。如何なる者に海を、この海際を形作っている海を否定で

きようか。

大洪水の時代には、ボスフォロスとエリニスポイントから黒海がその道を切り開いた。その場所の全ての島と全ての海岸が水を被り、肝をつぶした人々が水から唯一浮かび上がった、最も高い場所である島の山に命からがら駆け込み集まった。水がますます高く上ってきた時、人々は神々に祈った。そして溺死から救われるや否や、海が止まったその場所々々、島のあちこちに、偉大な神々への祭壇を救済と境界の印として建てた。これらの祭壇で、数千年経つてもまだ人々は神々に犠牲を捧げている。印は残っていて、その時以来島の境界となっている。しかし人々がその境界を築いたのではなかった。海がそれを造ったのだ。どうすればこのことに異議を唱えられるようか。だから人々は彼らの人工の印でそれを追認したにすぎない。島の境界は、人間の承認がなくともずっと残っているのに。

人々の船は、獐猛な北風や怒れる南風によって、海の方、島々の方、或いは向かいの陸地の方へ引き下がるために錨を上げるだろう。さもなければ全て沈んでしまう

だろう。だから島民達は、時に何の便りもなく他の人々と数か月を過ごす。夏の風でも、旅立ちにはまだ獐猛すぎることもある。彼らはただ彼らの内だけで話し、知らない人に向き合うこともなく、ずっと自分達のことばかり話し続けている。島民達はこのようになっていくのだ。他の人々からの便りが彼らにもたらされないようにするため、彼らは彼らの内で生き、いつも偉大な海の方を見ている。彼らの目は、町と知らない島そして海際のある海と、遠い陸地にばかり向き合うことに慣れきってしまった。彼らの耳は風の吹きすさぶ音と怒りに意識を向けることに慣れきってしまった。彼らはいつても海を疑うようになつた。そしてまだ海が笑っている時でも、島民達は思考を巡らせている。このように歓待の悪い海と海岸に結び付けられて何世紀も過ごしている。島民達は、この偉大な海に眼を投げかけ、海の轟音と風の呻きを聞きながら、何世代も自分達の中で過ごし生きてきた。そして彼らは別人になつた。

陸地は境界のために山が必要であり、山の隘路や低い見張り台に城砦を築かねばならない。それらの力は島の

ようにさきやかで、小さな山から平野の真ん中まで、かつてそこら中に城砦と、首飾りのような山々が境界として存在していた。

昔、他の人々は、その境界が見えない程自分達の場所を大きくしたので、彼ら自身も自分達の場所がどこまでなのかよくわからなかった。

しかし広い境界が、いつも広い知性や大きな心をもつ民を表すわけではない。ただ大きな人間の集まりを表すだけである。そして人間の集まりはさらに大きく引き伸ばされ、彼らの組織は再び壊れて、緩められ、個々の魂は地に墮ちる。

また強固な境界を有し、その周りで境界を見ている人々は、ますます群れ集まって警戒心を高め、彼らの魂は圧縮される。だが彼らは、自分達自身のことを簡単に忘れる事はなく、高みへと昇っていく。螺旋のように上を目指す。

島もこのようにその境界が全体を固く握りしめていて、また高みへと駆け上がる。

ギリシア人達は、ほとんど常に島民である^{十一}。ほとんど

どいつでも彼らの境界、海を見ていた。だが他の人々と彼らを隔てている海、まさに彼らの海は、ある場所から他の場所への旅に開かれている。

しかしながらその島は、いつも隔絶されたものであり、一個の閉じた世界である。そんな風に外から見られている。そして頂上の高みから、そんな風に海の中に打ち捨てられた島として見られている。

白海に浮かぶこの島で、大昔から嵐、地震、海底沈没が起こってきたように、この島もその境界もろとも失われることだつてありうるのだ。この海に潜って海綿を採取する水夫達は、この島とこの陸地の間に沈んだ町を目にすると言っている。そして古代人達も、かつてそこに海が飲み込んでしまった島があつたことを言及している。

^{十一} Τὸν Ἀργεῖον (1878-1920) : 外交官、政治家、ギリシアの民族主義的作家。父親は首相経験のあるステファノス・ドラグミス。バレス、ニーチェに影響を受ける。著作に『ギリシア文化』、『私のヘレニスムとギリシア』

^{十二} 底本は、Ἀργεῖον, Τὸν (1994b), Σαμοθράκη, Το νησί, Εκδόσεις ΒΑΣ. ΠΗΓΟΠΟΥΛΟΥ, Θεσσαλονίκη.

三 一四五七年のオスマン帝国による征服以来、サモトラキ島はオスマン領であり、一九〇九年当時もこの島はオスマン領であった。このサモトラキ島がギリシア王国に編入されるのは一九一三年のバルカン戦争以降のことである。

四 ドラグミスの偽名。

五 二〇一七年現在、ギリシアとブルガリアとトルコにまたがる地方。一八七八年、オスマン帝国により北部に東ルメリ自治州がおかれ、一八八六年にブルガリア公国によって併合された。その後も大部分はオスマン帝国の支配下に残されたが、二十世紀初頭にエディルネ以北はブルガリアに、エヴロス川以西はギリシア王国に割譲され、残る部分はトルコが確保して三か国に分断された。『サモトラケ』執筆の一九〇九年当時はオスマン帝国領である。

六 ここでの「小高い」は、エーゲ海の島々の中で最高峰の山であるサモトラキ島のサオス山（フェンガリ山）を指すと考えられる。

七 ペチコートは、スカートの下に着用する女性用の下着。スカートとの滑りをよくし、またスカートのシルエットを形成する目的で使われる。

八 Ὁ Εὐρῆπος は古代ギリシアの、特に軍事的な訓練を受けた青年を指す。

九 二つの海峡はボスフォロスとダーダネルス、また白海はエーゲ海を指す。

十 Ἡ Θέτις (テティス) はギリシア神話に登場する海の女神で、アキレスの母。

十一 οἱ Ἕλληνες のギリシア人は οἱ Ἕλληνες 。